



平成 29 年 9 月 1 日

佛教大学附属幼稚園

しろくまのつぶやき

園長 藤堂俊英

「つくつくほうしが なくころになると あのゆうびんマークが きつとしらせにきます 金色の空から もう 秋ですよ・・・って」。これはまどみちおさんの「赤とんぼ」という詩です。間もなく幼稚園の前の稲田には、装いをこらしたかかしが横一列に並び、郵便マークの赤とんぼが飛び交う姿を見かけるようになります。子どもたちには日焼けと共に、ひと夏の思い出が残されたことでしょう。

私が小学生のころ、今から60年以上前のことになりますが、まだ電気式の冷蔵庫が普及していなかった時代ですので、冷蔵庫は氷で冷やす型のものでした。故郷は海の傍の漁港のある町でしたので、船に積む氷を造る製氷会社があり、夏休みには兄や妹と交代で自転車で氷を買いに行きました。大きな氷の塊を家庭用の冷蔵庫に入る大きさに、大きなノコギリで切ってくれるのですが、時折サービスで大きい目に切ってくれと、帰ってからかち割り氷のジュースを作るのが楽しみでした。ただ子どもの自転車に載せるには重すぎて、帰るまでが大変でした。

氷といえば今年も何処かの動物園で、しろくまに果物やシロップの入った氷がプレゼントされたというニュースを見ました。あれを見るたびに内田麟太郎さんの「ほっきょく」という詩（『まぜごはん』より）を思い出します。

どうぶつえんでうまれた しろくまは こおりをだいている
きもちいいのか うっとりめをほそめている
ねむいような ねむくないような
しろくまは きいている どこかできいたことのある なつかしいおとを
でも それがなにかは おもいだせない
りゅうひょうを ふきわたるかぜ
なきかわす うみどりのむれ とどのさけび
かあさんの おなかのなかで きいていたもの
しろくまは だれにとなく つぶやく
「ぼくが すんでいたのは・・・」 「あったかい ところだったなあ」

しろくまの生れ故郷は<精確>に言えば氷の海というよりも、かあさんのあったかいおなかのなかです。私たちもまた、どんなに厳しい時や場に遭遇しても、いのちをはぐくむあったかさがあったことを、ふと思い出すことがあります。それはあったかい育みの心で育てられた者に与えられている大切にしなければならないもの、忘れてはならないものです。氷の故郷を知らないしろくまがふとつぶやいた、「あったかいところだったなあ」が、小さなころにも留まり、将来を支えて行くよう、子どもたちと向き合って行きましょう。